

部落の社会構造

—多摩市大字落合青木葉部落の事例より—

小山敏幸

(一)

部落の構造を知る為の、この調査研究は東京都多摩市大字落合にある、青木葉部落（人口一八三人、男九五女八七人、戸数三七戸（兼業農家数二八戸、非農家数六戸、外来家三戸））を対象として行なったものである。では何故、この部落に焦点を合せたのか。この住民であるにかかわらず、私は事実上、部落の構造がどの様になっているかを明確に把握することなく、単に部落内の表面的な出来事に対してのみ、気を取られておったが、その出来事に対し住民が何かを基準として動いているのではないかと考え、その基礎にある、様々な行動を支えている諸関係の存在を見極めるためにここに調査地を決定したのである。

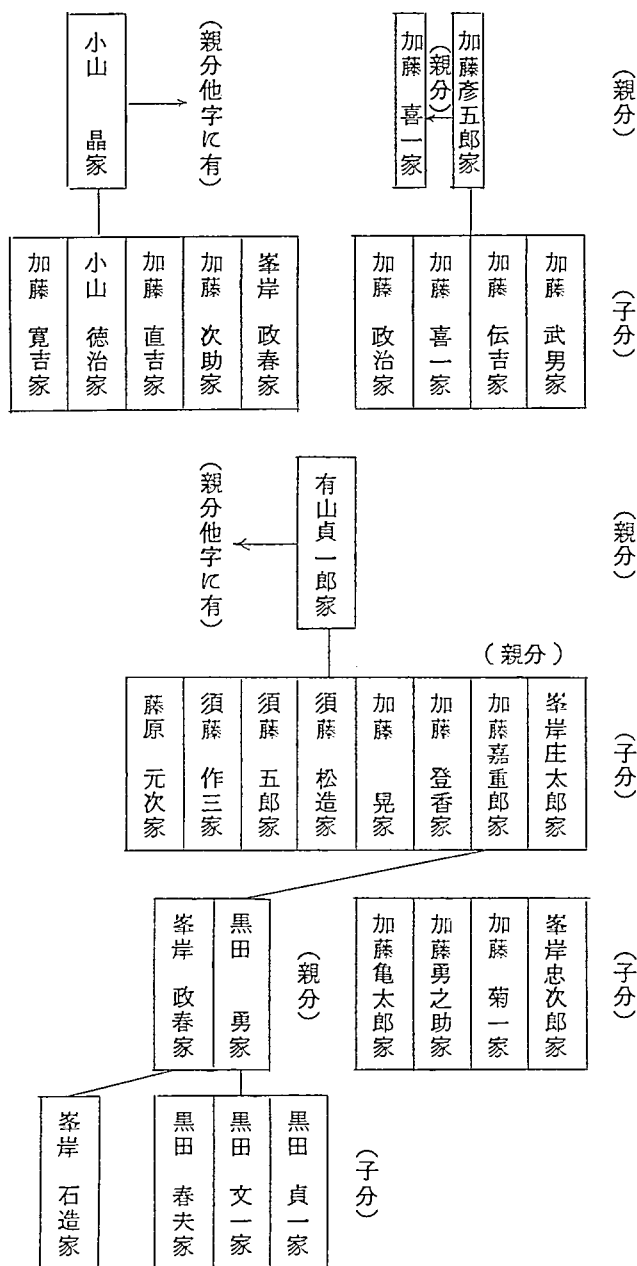
(二)

具体的には部落内の社会関係のうちで主なるものとして、同族関係、親分子分関係、地主小作関係、近隣集団（組）を基礎に置いて考えることにしたのである。

つまりこの関係において主要な位置を占めているところの、トップすなわち本家分家、親分子分、地主小作関係、近隣集団の上位にある家が、その構成員たる各々の家にどの様な形で結びついているかを調べてみたわけである。

次に、図Ⅰ、図Ⅱの説明によって部落構造を明らかにすることとする。

図Ⅰ 親分子分・関係図



部落主要五家を中心とする部落構造（近隣集団をベースとする。）

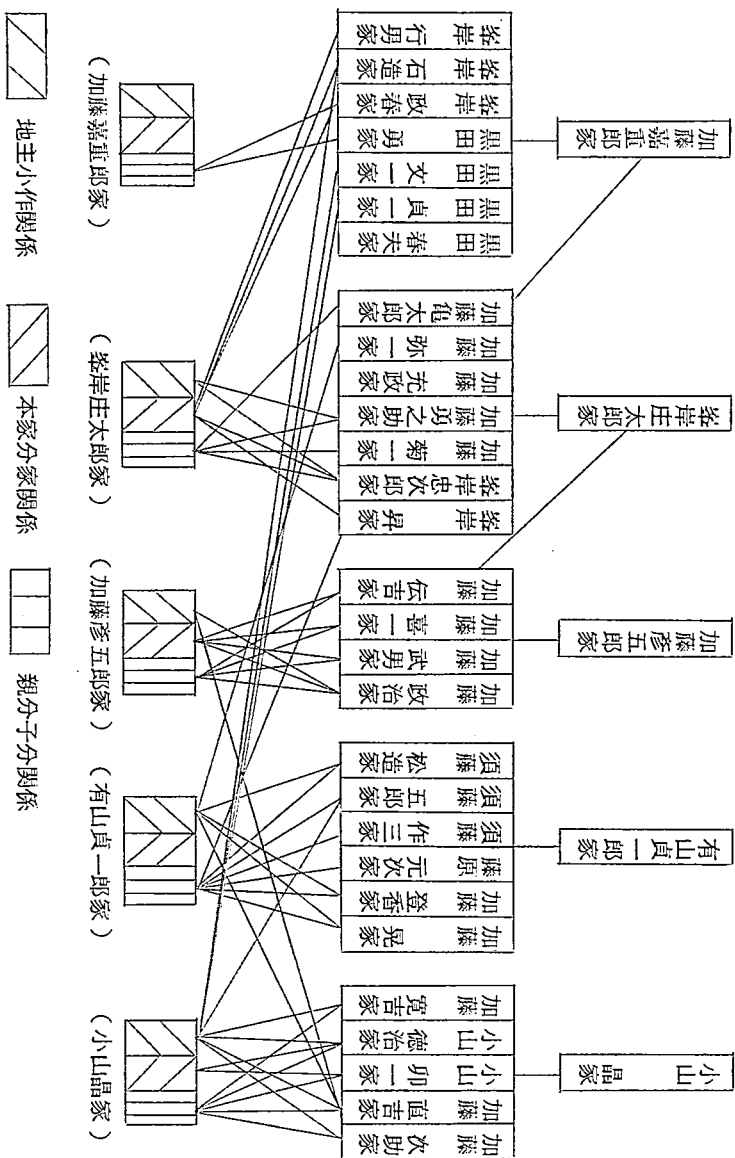


図 II 近隣集団をベースとする（近隣五家を中心とする）

先ず、当部落は図Ⅱ（部落主要五家を中心とする構造図）にある様に、その主要な五つの家である有山貞一郎家、小山晶家、加藤彦五郎家、峯岸庄太郎家、加藤嘉重郎家を中心にして構成されているということがわかるのである。ではそれを近隣集団を構成しているものから述べてみると、図Ⅱにある様に

有山貞一郎家の場合、この家を頭としている家は六戸、すなわち（加藤登香家、加藤晃家、須藤五郎家、須藤作三家、藤原元次家、須藤松造家）の家々である。

小山晶家を頭とする家々は五戸で構成家は（小山卯一家、小山徳治家、加藤直吉家、加藤次助家、加藤寛吉家）である。

加藤彦五郎家を頭とする家々は四戸、構成家は（加藤政治家、加藤喜一家、加藤武男家、加藤伝吉家）である。峯岸庄太郎家を頭とする家々は七戸、すなわち構成家は（峯岸忠次郎家、峯岸昇家、加藤菊一家、加藤勇之助家、加藤弥一家、加藤充政家、加藤亀太郎家）である。

加藤嘉重郎家を頭とする家々は七戸（黒田勇家、黒田貞一家、黒田文一家、黒田春夫家、峯岸政春家、峯岸石造家、峯岸行男家）であり、以上近隣集団はこれらの家によって構成されている。

そしてこの関係は図Ⅱに示した様に、他の社会関係である地主小作関係、同族（本家・分家）関係、親分子分関係とほぼ一致しているものである。

この有力な五つの家と各々の構成員たる家の関係を更に詳しく調べていくと、先ず有山貞一郎家の場合、自分の近隣集団の範囲である六戸のうち、地主小作関係によるものは三戸（須藤松造家、加藤登香家、加藤晃家）であり部落全体としては更に二戸（加藤弥一家、加藤直吉家）を加え合計五戸を有している。

また親分子分関係にあるものは、有山家において彼の近隣集団である六戸のすべての家々と、他に二戸を持っており、これは同じ部落内の有力家である加藤嘉重郎家、峯岸庄太郎家であり、合計八戸を部落内に持ち、有力家の中で最大の子分をかかえている。だが同族関係はと云うと、有山貞一郎家の場合、この部落には一戸もない。

次に、小山晶家の場合をみると、ここでは地主・小作・関係に基づく関係というものは自分の近隣集団の範囲内に四戸（小山徳治家、加藤直吉家、加藤次助、加藤寛吉家）もっており、また他に四戸（黒田貞一家、黒田文一家、峯岸石造家、須藤五郎家）を有し、部落全体では合計八戸を有している。

また同族・関係は二戸（小山卯一家、小山徳治家）である。

親分子分・関係は四戸、これは近隣集団の構成員とほぼ同じであるが、図Ⅰ（親分子分関係図式）が示す様に、ここで小山晶家が同族である小山卯一家を含まないのは最近部落に帰って来たからで、ここには含まれていないのである。

加藤彦五郎家の場合、この近隣・集団（加藤政治家、加藤喜一家、加藤武男家、加藤伝吉家）というものは、親分子分・関係も含めて、すべて彼の同族によって構成されており、地主・小作・関係は同族の一戸（加藤政治家）と、小山晶家の近隣集団を構成している加藤直吉家一戸の合計二戸を持っているに過ぎない。つまりここにおいては同族の自家すなわち親分、そして分家が子分であるという形において結ばれていると云える。

峯岸庄太郎家は地主・小作・関係に基づく家々を近隣集団の範囲に、二戸（峯岸忠次郎家と加藤勇之助家）を持ち、また同族・関係に基づくものはこの範囲内に二戸（峯岸忠次郎家、峯岸昇家）を持っており、部落全体としては、次に述べる加藤嘉重郎家の近隣集団に内在している彼の同族三戸（峯岸政春家、峯岸石造家、峯岸行男家）を持ち合計五戸を有している。

そしてまた、親分子分・関係においては四戸（峯岸忠次郎家、加藤菊一家、加藤勇之助家、加藤亀太郎家）をもっているのである。

最後の加藤嘉重郎家についてみると、この家は図Ⅱからも理解できる様に一戸の同族も無く、そして地主・小作・関係も一切もっていない、いわば自作地主であり、この近隣集団は頭である加藤嘉重郎家と同様な自作地主二戸（黒田勇家、峯岸政春家）と、この二戸の同族である。黒田勇家を本家とする黒田春夫家、黒田貞一家、黒田文

一家と、そして峯岸政春家を本家とする峯岸石造家、峯岸行男家によって構成されているのである。ここにおける社会関係というものは単に親分子分関係を結んだが、図Ⅱに有る様に同じ自作地主である二戸（黒田勇家と峯岸政春家）であるにすぎない。しかしながら、この親分子分関係にある二戸は五つの近隣集団から除かれている集団のものであるので、図Ⅰに述べてある様に、これを見ると黒田勇家は三戸の子分すなわち（黒田貞一家、黒田春夫家、黒田文一家）を持っている。そして又、峯岸政春家は一戸（峯岸石造家）の子分を持っているものであり、このことから事実上、加藤嘉重郎家はこれらの親分子分関係の累積の上に黒田勇家、峯岸政春家の子分をも間接的に支配しているのである。

以上、ここに述べてきた五つの家とその構成員たる家との関係をふり返って考えてみると次のことが云えるのである。つまり部落を支配している要素というものは、今まで述べてきた地主・小作関係、同族関係、近隣集団関係であり、それは、図Ⅱに示した様に、部分的な支配を意味するものではあるが、全体としてこれをまとめているものではない。

これに対し親分子分関係というものは全部落を支配する最も重要な形態であると云える。

これは何故か。部落最大の子分を持つ有山貞一郎家の場合を例にとって述べるようにする。

図Ⅰからもわかる様に有山家は直属の子分である八戸（峯岸庄太郎家、加藤嘉重郎家、加藤登香家、加藤晃家、須藤松造家、須藤五郎家、須藤作三家、藤原元次家）を持ち、この八戸のうちには部落内の有力家である峯岸庄太郎家、加藤嘉重郎家が含まれており、そして峯岸庄太郎家は直属の子分四戸（峯岸忠次郎家、加藤勇之助家、加藤亀太郎家、加藤菊一家）を支配し、また加藤嘉重郎家は直属の子分として二戸（黒田勇家、峯岸政春家）をもっており、更にこの二家である黒田勇家も峯岸政春家も各々の子分（すなわち黒田勇家は黒田文一家、黒田貞一家、黒田春夫家）を有し、峯岸政春家は子分として峯岸石造家の一戸を持っている。

以上この様に有山家は、部落総戸数三七戸のうち非農家六戸、外来家三戸、そして有山家自身と、小山晶家、

加藤彦五郎家の三戸の合計一二戸をのぞいた二五戸のうち半数以上の一七戸（一戸非農家を含む）を直接的、間接的に支配しているのである。

親分子分関係についてこれを説明している『日本の農村』を参照してみると、※日本の農村（潮見俊隆著、岩波書店 昭和三二年刊）『親分子分関係は多くの場合、婚姻の際に結ばれ結婚の際の本仲人が原則として親分になっている。

また縁組に際して仲人として選ばれる家は必ず両当事者の家格より一段と上に位いするか、或は有力な家である。従って当事者が同族集団の一員である場合は本家がこれに当り、そうでない者の場合は部落内の有力な家にこれを頼むと云うことである。』一六頁より。

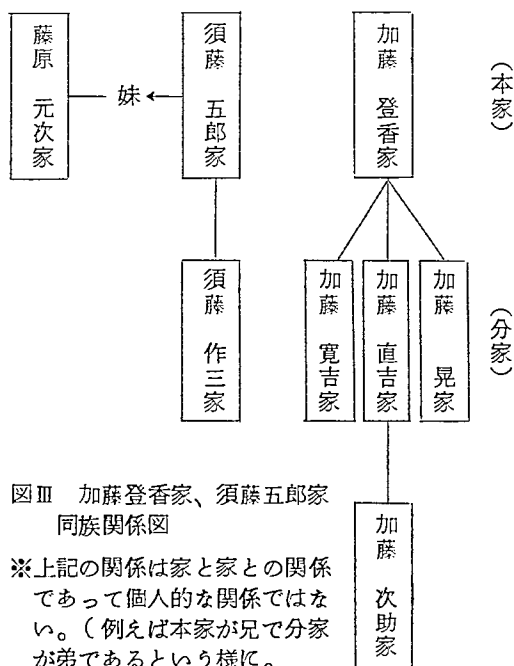
こうして更に他の小山晶家の支配する子分四家、加藤彦五郎家の支配する子分四家を、有山貞一郎家の直接的・間接的に支配する子分一六戸（非農家一戸を除く）に加えると、非農家、外来家、有山家、小山家、加藤（彦五郎）家を除いた二四戸のすべての家が実にこの親分子分関係によって支配されているのである。

つまりこのことからこの部落を動かしているものは親分子分関係であると云える。しかしこれは最終的なもの結果、即ちこの中に 同族関係・地主・小作関係などの諸関係が累積される如くして生じた結果であるということが出来るのである。

次にこの親分子分関係の家々の内容はどの様になっているかを先に述べた有山貞一郎家、小山晶家、加藤彦五郎家、峯岸庄太郎家、加藤嘉重郎家の集団順に見ていくことにする。

第一の有山貞一郎家の直属の子分である須藤五郎家、須藤作三家、藤原元次家の三家は、須藤五郎家を本家とする同族親族であり（藤原元次家は五郎氏の妹の嫁ぎ先である）、他の加藤登香家、加藤晃家においても、須藤五郎家と同じ形態すなわち、登香家が本家であり、晃家が分家となっている。

※須藤松造家の場合、須藤五郎家の一系であるかは不明。



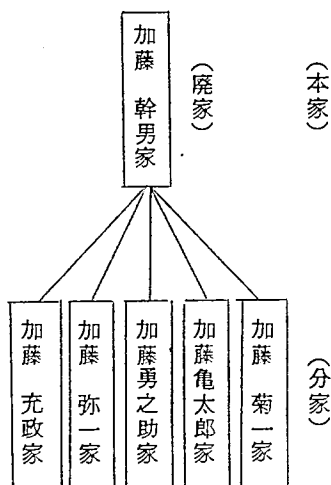
※上記の関係は家と家との関係であって個人的な関係ではない。(例えば本家が兄で分家が弟であるという様に。

次助家、加藤寛吉家が図Ⅲで示した様に、同族であり、この加藤家の本家筋に当る登香家がこれらを養うていくだけの力が無かった為に、この三家は小山晶家の小作となり、また家格等の違いによって遂には親分子分関係に成ったものと思われる。

また図 I に掲げてある峯岸政春家と小山家との親分子分関係については、一時期この関係をもったことがあるもので、現在ではこの関係は解消しており、加藤嘉重郎家との関係が強い。

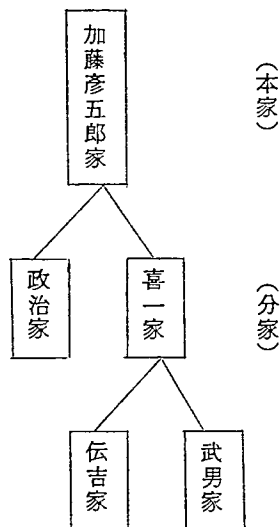
加藤彦五郎家と支配下の家々の関係は、前述した様にすべて同族であつて、ここにおいては、有山家、小山家

の様に土地というものを媒介とした上に親分子分関係が成り立っているのではなく、典型的に、本家Ⅱ親分、分家Ⅱ子分という形の上に成り立っていると云える。



図Ⅴ 加藤幹男家同族

※上記の関係は家と家との関係であって個人的な関係ではない。(例えば本家が兄で分家が弟であるという様に。)



図Ⅳ 加藤彦五郎家同族

※上記の関係は家と家との関係であって個人的な関係ではない。(例えば本家が兄で分家が弟であるという様に。)

また峯岸庄太郎家を中心とする関係は、氏の同族である峯岸忠次郎家と加藤菊一家、加藤亀太郎家、加藤勇之助家の四戸を持っているが、この場合、加藤菊一の同族三戸は図Ⅴが示す様に本家筋である加藤幹男が廃家となったために、この三つの家は峯岸庄太郎家に親分を頼んだものであろうと考えられる。つまりここにおいては図Ⅱにおいてみてもわかる様に地主小作関係を母胎としていない。

加藤嘉重郎家を親分とする家々の関係は、自作地主の黒田勇家と峯岸政春家の二者を中心にして構成されているが、この場合、何故有力家の峯岸庄太郎家の同族である峯岸政春家が加藤嘉重郎家を親分とするかは不明である。

しかしながら両者を中心に彼らの同族は縦のきずなを持ってつながられ、最終的

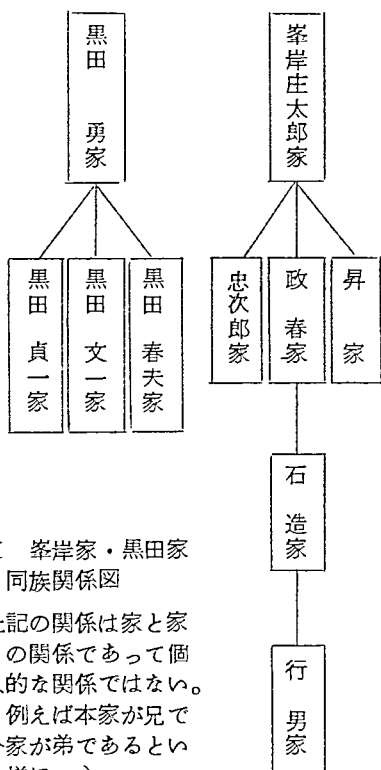
に勇家、政春家を通じて加藤嘉重郎家に結びついているのである。

ここにおいて何故自作地主という同じ立場にある加藤嘉重郎家、峯岸政春家、黒田勇家のうち、加藤嘉重郎家がこれらの親分となっているかは土地面積の多少によるものと考えられる。すなわち明治時代の名寄帳による三者の土地所有面積は、加藤嘉重郎家が、一町七反一畝一七歩、峯岸政春家が、一町三反三畝六歩、黒田勇家が、二反八畝（面積は少ないが一度も小作とならなかったので自作地主と見做した。）となっており、昭和四〇年まで変わっていないことから云えるのである。

（昭和四一年以降は多摩ニュータウン工事の為此の部落の土地は買収され始められる。）

（本家）

（分家）



図Ⅵ 峯岸家・黒田家
同族関係図

※上記の関係は家と家との関係であって個人的な関係ではない。（例えば本家が兄で分家が弟であるという様に。）

以上のことからこの部落において、親分子分関係を構成している要素というものは、有山・貞一郎家、小山・晶家の様に主に地作小作関係を媒介としたもの、或は加藤・彦五郎家の様に同族を中心としたもの、また峯岸・庄太郎家の様に自分の同族と、他に本家を失なった弱い同族によって成っているもの、そして最後に加藤・嘉重郎家の様に自作地主を中心とする三つの形によってこの青木葉部落は親分子分関係を成り立たせている。

これらのことから云えることは、家

格、土地面積の大小等のものがこの親分子分關係に大きな影響を与えているものであると云える。

※現在（昭和四八年）においては今まで述べてきた諸關係というものも単に近隣集団が生活の為の機構として生き残っているくらいで、他のものは、ほとんど衰退してしまい、従来の五家の発言力も昭和四二年のニュータウン工事の開始とともに低下し、昔の様な強大な力を持つことはなくなった。

そして農家数も形式的にその名を残しているのみで実質的には皆無となっている。